

コラム

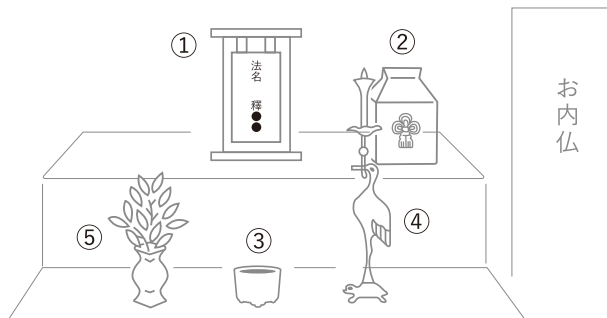
死から生を見つめ直す

ちゅう いん

中陰

中陰とは、人が亡くなってからの四十九日間のことを言います。故人の冥福（死後の幸福）を祈るのではなく、身近な人の死をとおして、誰もが死すべき無常のいのちをいただいていることにうなずいていくこと、言い換えれば、「生」（私）から死を考えるのではなく、「死」（亡き人）から生を見つめ直す大切な期間です。

四十九日までは、お内仏の近くに「中陰壇」を設け、①法名と②遺骨を安置し、③香炉・④燭台・⑤花瓶を置き、花瓶には^{しきみ}櫛を挿します。



▲中陰壇の一例(略式)

※中陰の数え方やお荘厳は、地域によって異なることもありますので、詳細はお寺にお尋ねください。

表紙イラスト「合掌」

…手のひらを合わせる礼拝の作法。



今月の門徒さん

「故郷のお彼岸会に参拝して」

野本 伸一さん（熊本西組 證明寺）

私は鹿児島県の霧島山麓の小さな集落に生まれました。周りは浄土真宗本願寺派（お西）の門徒さんが多い中で、約30戸の真宗大谷派（お東）の門徒が「講」（法話を聞くための集い）を護っています。

最近では春・秋彼岸と報恩講の3回、講が開かれています。当番になっている方のお宅にご住職が来られて、本山の様子や真宗の教えをお話されます。

私もそのたびに故郷に帰り、講の皆様と座談して楽しいひと時を過ごしています。最近では高齢化で参加者が少なくなっていますが、伝統的な法座を何とか存続させて欲しいと願っています。



「講」は真宗の教えを紡いできた大切な伝統です。ここまで熱心なご門徒がいてくださるのはとても心強いことです。

kyushu-kyoku

九州教区



発行：真宗大谷派 九州教区教化委員会

〒830-0038 福岡県久留米市西町 540-1 TEL.0942-32-3056

ごほんぞん

ご本尊

アフターケア通信

3

月号

春のお彼岸

お墓って何だろう？



春のお彼岸

お彼岸といえ

迷いの世界を「此岸」というのに対し、「彼岸」はそれを超えたさとりの世界、浄土真宗では阿弥陀仏の浄土を表す仏教語です。浄土は西方浄土と呼ばれるように、西の方にあるとされ、古くから日本では、太陽が真西に沈むこの時期に「彼岸会」という仏教行事を営んできました。

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉

のとおり、気候が穏やかになり、過ごしやすくなる時期でもあります。多くのお寺でお彼岸の法座が開かれていますので、ぜひ参拝しましょう。ところで、お彼岸と言え、お寺の法座に参るよりも、お墓参りを思い浮かべることのほうが多いのではないのでしょうか。

なぜお墓に参るのか

お墓は何のためにあるのでしょうか。大切な人を埋葬し、弔うということは、私たちにとってごく自然な行為です。しかし、お墓や遺骨に関して、方角や日の善し悪し、作法の正解不正解にとられることがあります。

そのようなとられ方は、亡き人を敬っているようで、実は自分の身に

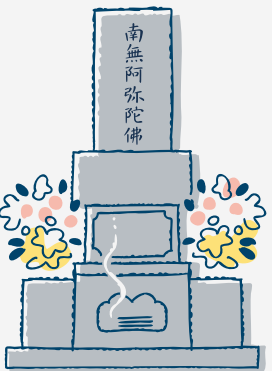
起こる都合の悪い事柄を避けたいという思いからきているのではないのでしょうか。

お墓は亡くなった方へお願いごとをする場ではありません。亡き人を偲びつつ、自分もいつかはいのちを終えていく身であることを教えられる。大切な人との別れをとおして、自らの生を考えていく尊い場です。



ちにまで届けられた教えに会う場所にするためです。

最近では、後継者の不在や時代の流れで、納骨堂や永代供養墓など様々な埋葬方法があります。どのような用いのかたちになろうとも、亡き人を偲びながらお念仏を申したいくという真宗の伝統を大切にしたいものです。



お墓に何を刻むのか

墓石に「〇〇家の墓」「先祖代々の墓」や故人の好きだった言葉が刻まれているのを目にします。しかし、真宗門徒は

従来「南無阿弥陀仏」や「俱会一処」(俱く一えい一じょ一とも)に一処いっしょえに会あする)などの仏語(仏さまの教えを表す言葉)を刻み、お墓を仏縁の場としてきました。真宗の教えに生きた先人は「わたしが死んでも石(お墓)の下にはおらぬぞ。遺骨を拝むのではなく、仏さま(ご本尊)を拝むのだ」と教えてくださっています。

墓石に仏語ぶつごを刻むのは、お墓を単に遺骨を納めた場所に終わらせず、私た